

異世界はスマートフォンと秘密道具とともに

シャト6

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神のミスで死んでしまった望月冬夜。しかし、同時期に同じくして死んだ者と一緒と同じ世界へ転生することになったのだった。

目次

第3話	第2話	第1話
11	3	1

第1話

「まことに申し訳ありません！」

目が覚めると、20代前半位の女性が俺に土下座していた。

「…はっ？いきなりなに?！」

当然、起きて目の前で土下座されてれば、普通混乱するよな。

「実はですね、貴方は私のミスで死んでしまったんです」

「……」

「それですね、貴方と同じく死んだ人がいますので、その方と一緒に転生していただきたいのです」

「はあ…」

転生ねえ。ま、別に前の世界に未練はないしな。

「別に構わねえけど」

「ありがとうございます。そして、転生していただきますので、特典を授けます」

「限りはあるのか？後、行く世界はどんな世界だ？」

貰える特典の数と、行く世界によってどんなのを貰うか考えたいしな。

「貴方が行く世界ですが、少し貴方がいた世界と似ています。そして、魔法や魔物が存在します。後、特典は差し上げます」

「魔法か…となると、召喚獣とかもいるのか？」

「そうですね」

「なら特典は…」

そして暫くし、特典が決まったのである。

「それでは、これから転生していただきます。身体能力等は、此方でサービスとして上げておきます。これで、余程の事がない限り死にません。では、向こうで目が覚めれば、一緒に転生した人がいますので」
そして俺の意識はそこで途絶えた。次に目が覚めると、芝生の上で寝転んでいた。

「んん〜…」

横から声が聞こえ、見ると見知った格好をした男が寝ていた。歳は

俺と同じか少し年下だな。

「あれ？貴方は」

「よう。俺もお前と一緒に、神と名乗る女神から転生させられたんだよ」

「そうだったんですか。俺は望月冬夜って言います」

「冬夜か。俺は谷川飛翔だ」

冬夜「谷川さんですね」

飛翔「あゝ、堅苦しいから名前で頼む」

冬夜「分かりました飛翔さん！」

お互い挨拶も終わったし、これからどうすっかな。

飛翔「とにかく、こんな場所にいるより人がいる場所に行かなきゃな」

冬夜「そうですね」

すると、どこからか着信音が聞こえてくる。冬夜を見ると、ポケットからスマホを取り出していた。

飛翔（この世界でスマホ？使えるのか？）

電話が終わり、スマホの事を冬夜に聞く。

冬夜「ああ、これは神様からの特典でお願いしたんですよ」

飛翔「特典でスマホって、欲がねえんだな」

冬夜「飛翔さんは、何を貰ったんですか？」

冬夜は逆に俺が貰った特典を聞く。

飛翔「色々だよ。随分気前のいい女神だな。ま、特典は追々教えてやるよ。で、どうすんだこれから」

冬夜「えつと…ちよつと待ってください」

すると冬夜は、スマホをいじりだす。

冬夜「マップを見た感じ、西の方に町があるみたいですよ」

飛翔「なら、とにかくその町に向かうとするか」

冬夜「そうですね」

そして俺達は、冬夜のスマホを頼りに歩き始めたのだった。果たしてこれから、どんな事が起きることやら。ま、退屈はしなさそうだな。

第2話

暫く歩いてると、冬夜があることに気づく。

冬夜「飛翔さん、今思ったんですけど」

飛翔「あ？」

冬夜「町に着いたところで、僕達この世界のお金持ってませんよ」

飛翔「……」

そう言われ俺は言葉を失う。そうだよ！新しい世界に転生して、前の世界の金が使えらるわけないわな！

飛翔「すっかり忘れてたな」

忘れてた事に頭を抱える。…ん？待てよ。けど冷静に考えて、別に金が無くても衣食住には困らんよな。女神に貰った特典の1つを使えば。

飛翔「冬夜」

冬夜「はい？」

飛翔「確かに俺達は、この世界の金は持ってねえ。だが、別に持つてなくても衣食住には困らんぞ」

冬夜「どうしてです？」

飛翔「俺の特典で、それは全てカバーできるからだ」

冬夜「へ〜！飛翔さんはそんな特典を貰ったんですか」

俺の言葉に冬夜は目をキラキラさせている。いや、そこまで大袈裟なりアクシオンせんでも。すると、俺達の後方から馬車が走ってきた。その馬車は、テレビで見た事のある、いかにも金持ちや貴族が乗りそうな見た目なのであった。

冬夜「少し端によりましょうか」

飛翔「だな」

俺達は邪魔にならないよう、道の端に寄る。そのまま馬車は通り過ぎていった…と思った瞬間、俺達の少し先で止まった。

「そこの君達…」

馬車から出てきたのは、髭が生えた小さなおっさんが降りてきた。そのおっさんは、俺達の事をジロジロ見だした。なんか気分悪いな。

冬夜「な、なにか…」

「こ、この服はどこで手に入れたのかね?！」

俺達を見てたんじゃなくて、俺達が着てる服に興味あったのかよ。けど普通に考えれば、この世界じゃ珍しいか。

「見たことのないデザインだ。それにこの縫製…一体どうやって…」

冬夜「飛翔さん」

すると冬夜は俺に声をかける。その時俺は、多分冬夜と同じ事を考えてたな。

飛翔「なるほど。なら、話はお前に任せる。余程の事がない限り、俺は口を挟まねえからよ」

冬夜「分かりました」

そして冬夜は、おっさんと話始めた。暫くすると、冬夜が戻ってきた。

冬夜「お待たせしました」

飛翔「それで?」

冬夜「はい、僕の服を売る代わりに町まで乗せていってくれるそうです。代わりの服も用意してくれるみたいです」

飛翔「そうか。けど、どうせ俺が着てる服も売ってくれて頼まれたんだろ」

冬夜「あははく…」

やれやれ。ま、別にいいけどよ。値段は冬夜が売った値段5倍で売るか。そして俺達は馬車に乗り、町に連れてってもらった。町に到着し、馬車は一軒の店の前に止まった。因みにおっさんの名前はザナックっていうそうだ。

ザナック「ここで服を揃えよう」

そして中に入る。

「お帰りなさいませオーナー」

ザナック「おい誰か、彼に合う服を見繕ってくれ」

冬夜「オーナー?」

ザナック「ここは私の店なんだよ」

なるほど。俺達の服を仕入れ、尚且つタダとはいえ自分の店の商品

を渡す。抜け目ねえなこのおっさん。で、結局冬夜は下着以外の全てを渡した。というか完全に追い剥ぎだらろあれ。

ザナツク「また新しい服を手に入れたら、是非持ってきてくれたまえ」

更に要求してきたな。ちやつかりしてやがる。

冬夜「は、はい。ところで、この町に宿屋のような場所はありませんかね?」

飛翔「だな。日が暮れる前に寝場所は確保しておきたいな」

ザナツク「宿屋ならこの先の大通りを右手に真っ直ぐ行けば一軒あるよ。【銀月】って看板が出るからすぐ分かる」

そして俺達は、教えてもらった宿屋銀月を目指すのであった。

冬夜「宿屋銀月…ってかあの看板、「ファッションキングザナツク」って書いてあったのか」

飛翔「すぐくネーミングセンスだな…」

ファッションキングって…

冬夜「ところで、飛翔さんはいくらで服を売ったんですか?」

飛翔「俺か?確か冬夜は金貨10枚だったよな?」

冬夜「そうです」

飛翔「元々決めてたんだよ。お前の5倍で売るってな」

冬夜「5倍って…金貨50枚!」

流星に枚数を聞いたら驚くか。

飛翔「ま、安く売るつもりはなかったからな」

冬夜「ひえ〜」

そんな話をしながら歩いてると、路地裏から声が聞こえてきた。

「約束が違うわ!代金は金貨1枚だったはずよ!!」

冬夜「なんだろう?」

冬夜は気になり、声が出た方に向かった。

飛翔「やれやれ、面倒な事になりそうだな」

俺は呆れつつも、冬夜の後を追いかけた。路地裏を見ると、いかにもガラの悪い男が2人、女性2人に絡んでいた。見た目は俺達と同じくらいか?

「見ろ、ここに傷があるだろ？だから銀貨なのさ。おらよ
すると男は、1枚の銀貨をあいつらの前に投げた。

「たったの1枚?!?そんな小さな傷、傷物の内に入らないわよ!!」

「お姉ちゃん」

「…もういい、お金はいらない。その角を返してもらおうわ」

ロングヘアーの方がそう言う。

「おっと、そうはいかねえ。もうこれはこっちのモンだよ」

なるほど、女だから甘く見てるな。やれやれ、どの世界にもこんな
連中はいるんだな。

冬夜「飛翔さん」

飛翔「ま、見て見ぬふりは気分が悪いからな」

そして俺達は、4人の所に行く。

冬夜「お取り込み中すみません。ちよつといいですか?」

「なんだてめえら」

「何のようだ!」

飛翔「お前らに用はねえ。俺達が用があるのは向こうだ」

「私達?」

突然出てきた俺達に対し、疑問の表情をする。ま、絡まれていきな
り話しかけられればな。

冬夜「その角、金貨1枚で僕に売ってもらえないかと」

「…売るわ!」

飛翔「なら、後は俺達の自由だな」

冬夜「そうですね」

冬夜は地面にあつた石ころを投げ、男が持ってた角を粉々にした。

「な、何しやがる!!」

冬夜「それはもう、僕達の物だから」

「ヤロー!!」

もう1人が冬夜に襲い掛かる。が、こいつも俺同様神に身体能力そ
の他諸々底上げされてるから、この程度のザコ問題ないだろ。なら俺
は、もう1人の相手でもするか。

飛翔「おい、男が女に手え出してんじゃねくぞ。首肉シユート!!」

「ぶげら!!」

男の顔が、見事地面に埋もれたのだった。

飛翔「つて一撃かよ!？」

そこまで力いれてないんだけどなあ。軟弱すぎるだろ。

飛翔「まあいいか。おい、無事か?」

「え、ええ…」

「だ、大丈夫です」

どうやら2人とも無事らしい。見ると冬夜の方も終わっていた。

冬夜「お疲れ様です」

飛翔「お前もな」

すると冬夜は、先程約束した金貨1枚を渡した。

冬夜「はい、金貨1枚」

「いいの? 私達は助かるけど」

飛翔「気にするな。砕いたのはこいつだし、キチンと約束したんだ。例え口約束でも、約束を破るなんてチョーしにのったことはしねえよ」

冬夜「その通り。構わないから受け取ってよ」

「じゃあ、遠慮なく」

ロングヘアの方が、そう言いながら金貨を受け取った。

「助けてくれてありがとう。私はエルゼ・シルエスカ、此方は双子の妹のリンゼ・シルエスカよ」

リンゼ「ありがとうございます」

ショートヘアの方が丁寧にお礼を言う。

冬夜「僕は望月冬夜」

飛翔「俺は谷川飛翔だ」

エルゼ「望月? 谷川? 珍しい名前ね」

冬夜「あ、名前が冬夜で、望月は名字」

飛翔「俺も同じだ。名前が飛翔で名字が谷川だ」

この世界じゃ、珍しいって言われても仕方ねえな。

エルゼ「へく、名前と家名が逆なんだ。イーシエンの人?」

冬夜「イーシエン?」

飛翔「ま、そんなところだ」

「どうやら、この世界にも日本と似たような場所があるみたいだな。」

エルゼ「この町へは何しに？」

冬夜「えっと、まずは【銀月】って宿屋を探して、それから考えようかと。ね、飛翔さん」

飛翔「ああ」

急に此方に話かけるなよな。

エルゼ「銀月って」

リンゼ「私達が泊まつてる宿ですよ」

そうなのか。なら丁度いい。

飛翔「悪いが、銀月に案内してくれないか？まだこの町に来たばかりで、場所が分からねえんだよ」

エルゼ「勿論いいわよ！」

リンゼ「はい」

そして俺達は、エルゼとリンゼの案内で宿屋銀月に向かうのだった。リンゼ達の案内で、俺達は無事に宿屋【銀月】に到着したのだ。

飛翔「1泊いくらだ？」

「ウチは1泊、朝昼晩食事付きで銅貨2枚だよ。前払いだけどね」

飛翔「なら、俺達2人金貨2枚で泊まれるだけ頼む」

「はいよ。金貨2枚なら、2人で50泊だね」

飛翔「流石に長いな。なら、2人とも1ヶ月分で頼む」

「そう言い、俺は自分の財布から金貨2枚を出す。」

「はいよ、1ヶ月ね。最近お客さんが少なかったから助かるわ♪ちよつと今銀貨切らしてるから、悪いけど銅貨でお釣りね」

そして俺はお釣の銅貨80枚を受け取った。1人辺り、1ヶ月銅貨60枚か。小銭が増えたな。ま、四次元ポケットに入れておけば問題ないか。

エルゼ「チエックイン終わった？」

冬夜「うん、今済んだとこ」

リンゼ「でしたら、ご一緒にお茶などどうでしょう」

エルゼ「いいわね」

「あら、あなた達知り合いなの？なに、もう男引つ搔けたの♪」

エルゼ「そ、そんなんじゃないわよ！」

そして茶に誘われた俺達は、他愛ない話をしだす。2人は紅茶で冬夜と俺は緑茶だ。けど、この世界に緑茶あるんだな。因みに、先程話したのは、この宿の娘であるミカって名前らしい。

エルゼ「全く、今日は酷い目にあつたわ。なくんか、胡散臭いなくとは思っていたんだけどさ」

リンゼ「だから止めようって私は反対したのに：お姉ちゃん、言うこと聞いてくれないから」

リンゼって苦労してるんだな。エルゼの場合、考えるより先に行動ってタイプだしな。姉がこんなんじや、妹の方がしつかりするはずだ。

冬夜「2人は何であいつらの依頼を受けたの？」

エルゼ「ちよつとしたツテでね。あたし達、前に水晶鹿を倒して角を手に入れてただけど、欲しいって話がきたから丁度いいやつて思つてさ。でもダメね。やつぱりギルドとか、ちゃんとした所からの依頼受けないと、やつぱりトラブルに巻き込まれるのね」

ギルドか。なるほど、だから町中歩いてて武器を持つてる連中が沢山いたって訳か。

エルゼ「この機会にギルドに登録しようか、
リンゼ」

リンゼ「その方がいいと思う。安全第一、明日にでも登録に行こう」
ギルドに登録か。ギルドに登録しておけば、金には困らんだろ。この金もいつまでもたないしな。

冬夜「良かったら明日、着いていつていいかな？僕もギルドに登録したいんだ」

冬夜がエルゼ達にそう言う。俺と考えは同じって事か。

飛翔「俺の登録しとくか。流石に金はあるが、働かねえと資金もいつか尽きるしな」

エルゼ「なら、明日一緒に行きましょう」

リンゼ「はい、一緒に行きましょう」

そして俺達は、明日宿屋の前で集合することを決め、今日は眠りに
つくのだった。

第3話

翌日、俺達4人は登録するためギルドにやって来た。

エルゼ「早速登録しましょ」

冬夜「そうだね」

受付にいる女性に話しかける。

冬夜「すみません。ギルド登録をしたいんですけど」

「はい。かしこまりました。そちらの方達を含め、四名様でございますか？」

飛翔「ああそうだ」

「四名様とも、ギルド登録は初めてでしょうか？よろしければ、簡単に登録の説明をさせていただきますが」

冬夜「宜しく願います」

そして俺達は、受付嬢からギルド登録等について説明してもらった。基本的に依頼者の仕事を紹介してその仲介料を取る。それがギルドだそうだ。仕事はその難易度によってランク分けされているらしく、下級ランクの者が上級ランクの仕事を受けることはできない。だが、同行者の半数が上位ランクに達していれば、下位ランクの者がいっても、上位ランクの仕事を受けることができるそうだ。それに関しては、昔遊んだゲームと一緒みたいだな。依頼を完了すれば報酬ももらえるが、もしも依頼に失敗した場合、違約料が発生することがある。それらそうか。自分のレベルにあった依頼を受けなきゃな。さらに数回依頼に失敗し、悪質だと判断された場合、ギルド登録を抹消というペナルティも課せられるそうだ。そうになると、もうどの町のどのギルドも再登録はしてくれないらしい。他に、五年間依頼をひとつも受けないと登録失効になる、複数の依頼は受けられない、討伐依頼は依頼書指定の地域以外で狩っても無効、基本、ギルドは冒険者同士の個人的な争いには不介入、ただし、ギルドに不利益をもたらすと判断された場合は別：と、いろいろ説明された。

「以上で説明を終わらせていただきます。分からない事があれば、その都度係の者にお尋ね下さい」

リンゼ「分かりました」

「では、此方の用紙に〽〽記入下さい」

簡単って言った割には、随分と長かったな。さて、ここで1つ問題だ。俺と冬夜は日本からこの世界に転生した。ということは、当然この世界の読み書きができるわけない。まあ、読むに関しては秘密道具を使えば済むが、流石に書くのは…結局、冬夜はエルゼに、俺はリンゼに代筆を頼んだのだった。情けねえ…そして記入した用紙を渡すと、受付嬢は黒いカードをその上に翳し、ブツブツと呪文らしいものを唱え始めた。そして何故か血が必要と言われ、俺達はピン先で指を少し切り、カードに押し当てた。なんかNOROTの〽〽寄せの術“みたいだな。

「はい、これで登録は完了です。このギルドカードは、ご本人以外が触れますと、数十秒で灰色になる魔が付与されています」

飛翔「何でそんな事を？」

「偽造防止の為ですね。また、紛失された場合は速やかにギルドに申し出て下さい。お金はかかりますが、再発行させていただきますので」

冬夜「ありがとうございます」

そして登録を済ませた俺達は、受付横にある依頼ボードで受ける仕事を探す。エルゼとリンゼは、どの依頼にするか話ながら選んでるな。その点、俺と冬夜は…

冬夜「マズイ…本格的に読み書きをどうにかしないと」

俺と同じで、読めないからただ突っ立ってるだけだな。仕方ねえ、早速初めての秘密道具を使うか。

飛翔「ほんやくコンニャク」タタタタン♪

やっぱり秘密道具を出す時は、この台詞と音楽だよな♪

冬夜「ど、どうしたの飛翔さん…急にド〇え〇んみたいな声だして」
飛翔「…気にするな。それより冬夜、これを食べ。書くことは無理だが、読むことはできるだろうさ」

冬夜「これって…」

冬夜は俺が出したコンニャクを見つめる。言いたいことは分かる

よ。で、取り合えず俺達はほんやくコンニャクを食べる。すると当然、今まで読めなかった文字が読めるようになる。

飛翔「取り合えず、これで読むのは問題ないな」

冬夜「そうですね。だけど驚きました。飛翔さんの特典が、まさか秘密道具だったなんて」

飛翔「貰った特典の1つだけだな。暫くは色々と役立つだろうよ」
エルゼ「ねえ」

すると、エルゼが1枚の依頼書を持ってやって来た。

エルゼ「これなんてどうかしら？初心者にはもってこいだと思うのよ」

飛翔「何々：『東の森で魔獣の討伐。一角狼を五匹、報酬は銅貨20枚』か」

エルゼ「なんなら、私達とパーティ組む？あんた達強いから心強いし♪」

リンゼ「うんうん」

エルゼの提案にリンゼが頷く。

冬夜「是非」

飛翔「だな」

エルゼ「分かった。それじゃあ受け付けに申請してくる」

こうして俺と冬夜は、エルゼ達とパーティを組むことにしたのだった。

冬夜「あっ」

リンゼ「どうしました？」

冬夜「僕、武器とか持ってない」

リンゼ「えっ!?!ええ〜」

飛翔「そう言えば俺もだな」

特典の1つの【秘密道具】はあるけど、普通の武器でどこまで戦えるか知りたいしな。そして申請を済ませたエルゼが戻ってき、先程の事を説明して出発前に俺達の武器を買うことにした。武器防具屋は、冬夜のスマホで簡単に見つかった。店に行き中に入ると色々な武器や防具が飾られていた。

「らっしやい、何をお探して」

店の置くからかなりガタイのいいオヤジが出てきた。毛深いしパツと見熊だな。けど、武器防具屋のオヤジだし、ガタイよくて当然か。

エルゼ「この2人に合う武器を探しにね。少し店内を見せてもらおうわ」

「あいよ、ごゆっくり」

俺と冬夜は、それぞれ自分に合いそうな武器を探す。俺にはリンゼ、冬夜にはエルゼがついてる。

リンゼ「飛翔さんは、どんな武器がいいんですか？」

飛翔「そうだな」

武器かく。どうするかな…ゾロとかみたいに日本刀もいいし、ミホークのような剣、ランサーみたいに槍、拳で殴るのもいいな。けど…やっぱり刀だな。すると、店の壁に前世で見た日本刀が飾ってあった。それを手に取ろうとすると、冬夜とぶつかる。どうやら、冬夜もこれがいいみたいだな。

飛翔「見事に被ったか」

冬夜「みたいですわね」

どうするかな。見た感じ、これはこの1本だけみたいだが…

飛翔「なあ、この刀って他にもあるのか？」

「悪いが、ウチの店にあるのはその1本だけだ」

冬夜「因みに値段は？」

「1本金貨2枚だ」

エルゼ「金貨2枚!?高いわね」

値段を聞いてエルゼが驚く。

「滅多に入手しないからな。使い手も限られるしそんなくらいにやなるさ」

冬夜「うくん…」

飛翔「冬夜、買うなら今回はお前に譲るぞ」

冬夜「い、いいんですか!？」

飛翔「ああ」

驚く冬夜に、俺は頷く。

リンゼ「ですけど、飛翔さんはどうするんですか？」

エルゼ「そうよ！いくらなんでも武器なしは危険だわ！」

飛翔「だが、依頼書を見た感じ、そんなデカイ相手じゃないだろう？
狼くらいならなんとかなるだろうよ」

リンゼ「で、ですが…」

飛翔「心配すんなって」

こうして、刀は冬夜が買い俺は素手で戦うことになった。特典貰つてるし、狼相手なら武器秘密道具なしでどこまで戦えるか知りたいしな。

冬夜「それじゃあ、行きましようか」

エルゼ「そうね」

リンゼ「はい！」

飛翔「よっしゃー！」

冬夜「けど飛翔さん、あまり無理はしないで下さいね。大丈夫とは思いますが」

最後の部分だけ、俺にだけ聞こえる声で話しかけてきた。

飛翔「分かってるから心配すんな。女神のお陰で鍛えることもできたしな。使ってみたい技もあんだよ」

そして討伐に出発した。さて、どれくらい歯応えがあるか楽しみだな♪